

## 弱い息子の物語——吉行淳之介文学を読み直すために

游書昱

### はじめに

吉行淳之介の作品にみる「性」と人間関係への探求心は日本の文壇に評価されてきた<sup>1</sup>が、フェミニズム批評においては吉行の描いた「性」のあり方と男女関係に対しての異議申し立てが行われた。例えば、上野千鶴子・小倉千加子・富岡多恵子の『男流文学論』（1992年）はその代表的なものだと言える。『男流文学論』にみる吉行の作風への批評は、辛辣である。

上野 （前略）近親相姦かもしれない、というすぐネタの割れる仕掛けなんか出してきた、その上で、自分を置き去りにして快樂の淵に沈んでいく、女というこの獣のおぞましきは、というふうに女という種全体をポーンと蹴り飛ばして、闇の彼方に追いやっている。

富岡 それはあらゆるところにあって、最後はそこへいくんです。

上野 全部そうですね。驚くべきウーマン・ヘイティング（女性嫌悪）ですね。<sup>2</sup>

『男流文学論』では、吉行の『砂の上の植物群』（1963年）が一例として挙げられ、吉行の女性の描き方は女性を一時的に客体化・他者化し、あまりにも男性中心的で恣意的だと批判されている。こうしたフェミニズム批評の視点は吉行の作品の男性中心主義だけではなく、吉行の作品を評価してきた日本の文壇自体が男性中心な場だということをもあぶり出した。管見の限り、フェミニズム批評の吉行文学の読み方に対する反論はなされていない。この意味でこの指摘は現在においてもなお有効性を持つ。ただ、問題がないわけではない。それは、こうした見方は吉行文学の男性性を均質化してしまい、その男性性の複数性を捉え損ねる恐れがあるのではないかということである。

フェミニズムは「男性」とその外部の「女性」の力関係の非対称性に着目し、「男性」による女性支配と搾取を摘発した。しかし、フェミニズムは「男性」内部の問題に関してはそれほど言及していない。男性性の複数性などの「男性」内部の問題を考える手がかりを与えるのは、ウーマン・リブの影響を受けて誕生した男性学である。男性学は男性も女性と同じジェンダー化された存在であるという立場に立ち「男の生きづらさ」などの男性の経験を言語化してきた。例えば、多賀太はフェミニズムが問題視した「家父長制」の構造について次のように述べている。

1

例えば森川達也は、「よく指摘されるように、吉行淳之介の小説が描くものは、長編であると短編であるとを問わず、常に男と女とのあいだに生まれる愛と性との関係のかたちである、それ以外のものには、目をくれようとししない。それだけが、あらゆる人間に妥当する、永遠にかわることのない真実である、と確信しているからである」と、吉行作品の特徴をまとめている。（「吉行淳之介短編小説の魅力」『国文学 鑑賞と解釈』50（7）至文堂、1985年6月、114頁）

2

上野千鶴子・小倉千加子・富岡多恵子『男流文学論』筑摩書房、1992年1月、23頁

フェミニストが「家父長制」と呼んできた男性支配の社会構造は、少なくとも現代の多くの先進産業社会においては、すべての男性がすべての女性を同じように支配するという単純な構造なのではなく、特定のタイプの男性性が、女性性と他のタイプの男性性を従属させることによって、全体としての男性による女性支配を正当化するという構造なのである。<sup>3</sup>

3

多賀太「男」をどう見るか」『新編 日本  
のフェミニズム 12 男性学』岩波  
書店、2009年12月、268頁

多賀によると、男性支配の社会構造では、女性性が霸権的な男性性に抑圧され支配される一方、じつは霸権的なタイプではない男性性もまた抑圧の対象になっている。そして、男性は、男らしいかどうかをめぐる序列化されており、男らしくないとされる男性性は従属化されてしまうのである。このように、「男性」内部の序列関係を指摘し「従属的男性性」を可視化することは、男性性の一面性に亀裂を生じさせることにつながり、また家父長制そのものへの批判の足場ともなるだろう。それゆえ、「男性」内部の「従属的男性性」や、男性性の複数性と序列問題は注目されるべきである。

さきほど、男性学は男性の経験の言語化に力を入れていると述べたが、しかしながら、今もなお、十分に言語化されていない男性の経験が存在する。それは、息子たちの経験である。平山亮は、男性の息子としての経験に注目し、その現状をふまえて男性学における息子の経験の言語化の欠如を次のように批判している。

男性学が対象とする男性とは、親から分離することで、自分が息子であることを「なかったこと」にしている男性であり、男性学が言語化してきた男性の経験とは、正しくは、(母)親との関係を「なかったこと」にしている男性の経験だったのではないか。息子としての男性の経験を視野の外に置くことで、男性学自体が、男性とは何か、あるいは、男性とは何であるべきかを取り決める、規範的な営みを行ってきたともいえる。<sup>4</sup>

4

平山亮『介護する息子たち——男性性の  
死角とケアのジェンダー分析』勁草  
書房、2017年2月、15–16頁

平山は、息子の経験が男性学において「意図的に」看過されていることを指摘し、加えて「男性」の問い直し、もしくは再構築の際、どのような男性の経験が除外されるのかに注意を払う必要があると示唆している。平山の示唆を受けてあらためて確認したいのは、息子の経験がどのように語られてきたのかということである。

息子の物語を思考する時に、まず思い浮かぶのはフロイトの有名なエディプス・コンプレックスである。エディプス・コンプレックスにおいて、息子は父と同じ土俵に上がって競争することになる。その際、息子は、父親との競争に勝たないと立派な男性になれない。しかし、それが息子を強迫観念に追い込む可能性はないだろうか。父親との対抗関係は息子にとって閉塞的なものにもなりうるからだ。

『アンチ・オイディプス』(1972年)でエディプス・コンプレックスを批判したドゥルーズとガタリは、カフカを論じる際にもエディプス・コンプレックスの閉塞性を問い直し、父親と息子の力学関係について以下のように言及している。

カフカが言うように、問題は自由の問題ではなく、出口の問題である。父の問題は、父に対してどのように自由になるかということ（オイディプス的問題）ではなく、父が見出さなかった場所でのようにひとつの道を見出すかということである。したがって、父と息子に共通の潔白さ、共通の苦悩があるという仮説は、すべての仮説のなかで最悪である。<sup>5</sup>

そして、「オイディプスの上へ、また家族のなかへ自己を領域回復するのではなく、世界のなかへオイディプスを非領域化させる」<sup>6</sup>のだと、エディプスの図式そのものの解消の重要性を述べている。父との対抗関係から脱出する出口を見つけ出すことには、ただ父の支配下から離れていくことを意味するだけではない。それは、父との競争の土俵から自ら降りることをも象徴的に示す。父との対抗にあえて背を向けて自分なりの生き方を探るのはエディプスの図式による抑圧から自らを解放する一種の方法だと考えられる<sup>7</sup>。

しかしながら、父親を乗り越える気力も脱出の出口を探す術もなく、父親との関係においてただひたすら恐怖心を煽られてどうしようもない息子もいるのではない。そのような弱い息子の経験というのは、これまで語られてこなかった。あるいは、語られていたとしても注目されてこなかった。エディプスの図式では、息子は自らの自立を目指すために父を乗り越える物語を雄弁に語らなければならない。その語りを通して、息子は父親との関係を再構築するのだが、その一方で、父親に敵わない経験は排除されていく。なぜならば、父親を乗り越える物語が雄弁に語られれば語られるほど、弱い息子の物語は許されないものとして抑圧されるからである。結果的に、エディプスの息子の物語だけが一人歩きをし、弱い息子の物語は不可視化されてしまうのだ。それゆえ、このような弱い息子の経験を可視化することは、父子関係を再考し、男性性の複数性を浮き彫りにする可能性を持つ。

また、父子関係の問い直しにおいては、父子間の非対称性を明らかにするため父子間の暴力という問題も再検討する必要があると思われる。父子関係はいうまでもなく一種の男同士の関係である。渋谷知美の指摘によると、男同士の暴力は、「男同士の固い絆の証」であり「当たり前のこと」にすぎず、男男間の暴力とは捉えられない傾向がある<sup>8</sup>。父と息子という男同士の関係における暴力の問題も同様であろう。加えて、父親の暴力的な言動は「獅子の子落とし」の如き「もっともな理由のある、正当な行為」<sup>9</sup>として見なされ、暴力として捉えられない可能性が高いと思われる。父親に抑圧される弱い息子の経験を拾い上げることは、いわゆる「もっともな理由のある、正当な行為」にひびを入れ、父子間の暴力の可視化にもつながるはずである。

以上を踏まえて本稿では、吉行淳之介の作品における「従属的男性性」を見出し、吉行文学の男性性の複数性を捉えたい。特に、男性性にも見落とされてきた弱い息子の経験を可視化することを図って吉行淳之介文学における父子関係を分析の対象とする。具体的には、吉行の短編小説「夏の休暇」（1955年）と

5 G・ドゥルーズ／F・ガタリ（著）、宇波彰／岩田行一（訳）『カフカ——マイナー文学のために』法政大学出版局、1978年7月、15頁

6 同注5、16頁

7 一例として、対抗回避の概念を援用したリービ英雄の作家論がある。青柳悦子「複数性と文学——移植型〈境界児〉リービ英雄と水村美苗にみる文学の渴望」（『言語文化論集』（56）、筑波大学現代語文化学系、2001年3月）は、ドゥルーズとガタリの『カフカ』を引用し、作家リービ英雄が〈父の言語〉＝英語を拒絶し、日本語で創作活動をするのは、ある種父との競争関係における出口を見出すことだと論じている。青柳の研究を踏まえてリービ英雄の「星条旗の間こえない部屋」（1987年）における父子関係をあらためて読んでみると、主人公のベンがアメリカ大使の父の反対を押し切って日本語を積極的に習得し、最後アメリカ大使館から家出をして新宿に飛び込むのは、まさに父との閉塞的な関係性から脱出するために取った行動だと解釈できるだろう。

8 渋谷知美『平成オトコ塾——悩める男子のための全6章』筑摩書房、2009年9月、108頁

9 「暴力と暴力でないものとの境界線は特定の動作や力そのものに宿っているわけではなく、それらを私たちがどのような文脈の中で行使するか。言い換えれば、どのように意味づけるかにかかっています。いかなる行為も、もっともな理由のある、正当な行為とみなされれば、暴力ではなく、もっともな理由のない、不当な行為とみなされれば暴力と呼ばれる可能性があるのです。」加藤秀一『はじめてのジェンダー論』有斐閣、2017年4月、136頁

「梅雨の頃」(1956年)を分析する。弱い息子の経験を言語化する両作品の分析を通して、吉行文学の新たな側面の指摘を試みることで、ジェンダー・スタディーズの発展にも貢献し得る成果を上げたい。

## 2. 吉行淳之介作品にみる父子関係を再考する——弱い息子に目を向けて

まず、吉行の文学における父子関係がどのように読まれてきたのか、まとめたい。

吉行淳之介は父親吉行エイスケとの思い出をしばしば創作の素材に使っている<sup>10</sup>。それゆえ、父親との関係は吉行淳之介文学の大きなテーマとして注目され論じられてきた。例えば、松本鶴雄は吉行淳之介の文学を「父性的」だと評している。

考えてみるに現代、この作家のように男性的なもの、父性的なものを自分の文学の基軸にすえている文学者はまれである。(略)骨太い、しかも冷徹な男性的な文体と思想を持った〈父〉を超えて自立している作家である。<sup>11</sup>

松本は吉行淳之介のエッセイを取り上げ、吉行の父親への感情を「エディプス・コンプレックスと言うほどではない、もっと素直な親近感」としながらも、最後に吉行の文学を「父性的」や「〈父〉を超え」たものとして評価し位置づけている。端的に言って、松本の論考は父親を乗り越えるエディプスの図式を再生産している。近年の論考においても同様にエディプスの図式を踏まえる傾向がある。たとえば、清水義和は吉行淳之介の『砂の上の植物群』を分析し、その小説にみるエディプス・コンプレックスの問題を検討している<sup>12</sup>。長瀬海は、高度経済成長期に誕生した中間小説に着目し、吉行が如何に中間小説を創作することを通して父との関係を問題化して文学の達成を遂げたのかを時系列で追っている<sup>13</sup>。以上のように「〈父〉を超える」あるいは「〈父〉を超えようとする」ことは、吉行淳之介文学における父子関係の主題として読まれ、ほぼ定着しつつあると言える。しかしながら、本稿であらためて問いたいのは、吉行淳之介の描く父子関係はすべてエディプスの図式に収まるものなのかということである。吉行の文学を「父性的」という枠組に収斂させようとする男性中心的な論じ方ではない読みは、不可能なのだろうか。

吉行淳之介は、エッセイ集『詩とダダと私と』(1979年)の中で父親エイスケについて以下のように述べている。

私は父親の文学については甚だしく否定的で、短い短編でも終りまで読んだのは一作もない。(略)ただ、その人間については興味はある。私とはずいぶん違う人間で、腕力も強かった。／繰返すが、私は文豪の息子という立場からは程遠いが、父親についての記憶の大部分は、罵られたり、殴ら

10

例えば、「子供の花火」などの作品を例として挙げることができる。「子供の花火」は1957年10月の『別冊文藝春秋』に掲載された吉行淳之介の短編小説である。作中では吉行と思われる語り手の男性の自分の父親への思いを語る場面がある。「僕は父親の作品にたいして否定的であるが、彼の人間に関しては甚だ興味を持つてゐる。結局のところ、彼はダダリストだつたとおもうし、ダダとして偽物ではなかつた、と僕は考えている。」(「子供の花火」『別冊文藝春秋』(57)、文藝春秋、1957年10月、238頁)

11

松本鶴雄「吉行淳之介における〈父〉と〈子〉の風景」『國文学 鑑賞と解釈』40(11)至文堂、1975年10月、79頁

12

清水義和「吉行淳之介のオイディプス・コンプレックスと村上春樹のアンチ・オイディプス」『愛知学院大学語研紀要』40(1)、愛知学院大学語学研究所、2015年1月

13

長瀬海「吉行淳之介と中間小説」『戦後日本を読みかえる 第3巻 高度経済成長の時代』臨川書房、2019年3月

れたりしたもので、その微妙な体臭を嗅いだという記憶はほとんどない。<sup>14</sup>

吉行は父エイスケのことを「私とはずいぶん違う人間」だと、自分を相対化する存在としてはっきりと意識している。この叙述には、子供だった吉行と暴力を振るう腕力の強い父親の関係の非対称性が垣間見られ、父親の暴力性と息子の従属性が浮かび上がっている。吉行の文学には、父親を恐れる無力な息子という主題が隠れているのではないか。本稿で扱う吉行の短編小説「夏の休暇」（1955年）と「梅雨の頃」（1956年）には同じ主題がうかがえる。父親との緊張関係を描いたこの二つの作品とも父の死を経験する少年の物語である。

両作品の先行研究はきわめて少ないが、種村季弘は、「梅雨の頃」の父親の死について、「家庭的にも経済的にもじぶんを取り囲む世界を支えていた大黒柱がぼっくりと折れ、父に支えられていた世界が潰滅したことを意味する」<sup>15</sup>という解釈を加えている。しかし、この二つの作品の結末に注目すると、父親の死を経験した少年は物語の最後に「解放感」たる感覚を体感することが示されている。つまり、主人公の少年は確実に父親の死によって抑圧状態から解放されている。このことを考えると、物語の父親の死がもたらす意味は決して「父に支えられていた世界が潰滅」するということだけではないだろう。偉大なる存在としての父親を肥大化させるような論じ方は、またしても弱い息子を沈黙させ、父子関係をエディプスの図式に回収してしまう。この点こそ、吉行文学の父子関係のこれまで看過されてきた問題なのである。

### 3. 「夏の休暇」の理不尽な父親

「夏の休暇」は1955年6月の雑誌『文学界』に発表され、のちに短編集『漂う部屋』（1955年11月）に収録された短編小説である。この小説は吉行が実際に両親に連れられて大島の三原山に旅行に行った時の思い出を基にして書いたものである<sup>16</sup>。父親の暴力性・理不尽さを見つめる少年の物語が展開されている。

主人公は一郎という小学五年生の男の子である。一郎には若い父親がいるが、その父親の人物設定は特徴的なものである。「兄ともおもえる年配」の父親の姿は一郎の目に以下のように映る。

一郎が父親の方に眼を向けると、そこには一人の青年の横顔があった。その横顔は、抵抗できぬ美青年そのものとして、一郎の眼に映ってきた。まったく一郎の父親の年齢は若かった。異常なまでに若い。<sup>17</sup>

父親の若さと美貌は一郎の視線を通して強調されている。それは「抵抗のできぬ」ほどのもの、言い換えればある種の強みとして描かれる。それだけではなく、父親の体格の良さは、小説の後半の父親の海で泳ぐ姿の描写から見て取れる。

14  
吉行淳之介『詩とダダと私と』作品社、1979年6月、123頁、127頁

15  
種村季弘「南瓜の馬車が迎えにくるまで」『吉行淳之介の研究』実業之日本社、1977年6月、143頁

16  
吉行淳之介「綴方について」『吉行淳之介全集13』新潮社、1998年10月

17  
吉行淳之介「夏の休暇」『子供の領分』番町書房、1975年12月、14頁



やがて、パンツ一枚の父の姿が広い背中を見せて海に歩いて行った。(略)  
大きな波を、巧みに乗越えながら、どこまでも沖に向かって進んでいった。<sup>18</sup>

18  
同注17、32頁

「広い背中」と泳ぐことが上手という描写からみると、父親は優れた肉体の持ち主と思われる。しかし、顔立ちも体格も良くて若い父親は、じつに気難しい人なのだ。

一郎の視界のなかに、父はめったに居ることがない。そして、たまに父と向い合っていると、一郎は動かし方の分らない機械の前に坐っているような気分襲われることがある。たまたま家の中に姿をあらわした父親が、不意に烈しく一郎を叱りつけることがある。一郎には、どう考えても叱られる筋道が分らないのだ。<sup>19</sup>

19  
同注17、12頁

父親との接し方に困惑する一郎は、父親の理不尽な怒りは自分に向かうのではなく、たまたま自分がその怒りの波の道すじに居るから突き当たってしまうのだと自分に言い聞かせる。そして、そんな「父親の身のまわりに子供の頭でははっきり理解できない現象が起ってもさして不思議」ではないと思い、何とか落ち着きを感じるようになる。「夏の休暇」の父親像は強いものとして立ち上がっている。少なくとも一郎にとって父親は強い存在である。「夏の休暇」では一郎が迷惑のようにすら感じる父親の理解し難さ・理不尽さが繰り返し描かれるのである。

「動かし方の分らない機械」のような父親は、ある日突然一郎を旅行に連れて行ってやると言い出す。一郎は、船に乗ってO島に行きM山に登るというスケジュールを聞いて「真青な海を進んでゆく汽船」と「火を吐いている山」を想像して興奮した。だが、父親と二人っきりの旅行になるとすると、一郎は「ちょっと迷惑な感じ」をせざるを得ない。とは言え、結局一郎は父親と一緒に旅に出ることにする。一郎と父親は旅先のO島に向かう汽船の中で父親の愛人のさわ子と合流する。さわ子の合流によって一郎は父親と二人きりになることを回避できたが、父親との関係は特に変わりなく、父親も依然として掴みどころのない存在でいる。一郎の船酔いした様子が父親の反感を買ったといったエピソードをはさみながら、物語が中盤に進むと、さわ子が一旦帰ることになるため、一郎は父親と二人きりにならなければならない。その時の一郎のつらい気持ちは印象的に描出されている。

さわ子と一旦別れた一郎と父親はO島を離れてI半島の温泉地Aに向った。父親が五日ほど滞在する予定を立てるが、一郎にとって「毎日、父と同じ室で暮らすことは苦痛」で仕方ない。それにA温泉に来てから父親は「機嫌がわるく」落ち着きのない様子でいる。そのような父親を見ると、一郎はどうすればいいのかわからなくて「気詰りで閉口した。」一郎は父親を笑わせるために駄洒落を言ってみるもやがて「洒落を言う作業がひどく苦痛になって」くる。こうしてA温泉に窮屈に滞在している中、父親がキャッチボールをやろうと言い出し、

一郎を宿の前の砂地に連れ出す場面がある。

宿の前の砂地で、父は一郎に向かって渾身の力をこめて硬いボールを投げつけてくる。一郎は意地になってそのボールを受け止める。(略)グローブをはずすと、左手の掌には赤く血の色が集って、ヒリヒリ痛い。父親の姿は見えなくなっている。<sup>20</sup>

20  
同注17、24頁

「いつでも軀を動かしていなくては気が済まぬ」父親は、キャッチボールを通して自分の気分を晴らすように見える。一郎はまるで父親の気晴らしに使われ、父親の「怒りの波の道すじ」に置かれたのである。一郎の「ヒリヒリ痛い」掌はまさに父親の理不尽さを訴え、一郎のつらい気持ちを象徴しているように読める。またある時、父親は前触れもなく一郎の髪型に不満を言い出し、一郎を床屋に連れていこうとする。「ずっと髪の毛を長くしている」一郎はいきなり坊主刈りにされることが一大事だと思って固く拒否すると、やはり父親に怒られてしまう。このように父親の苛立ちは重複して描かれるが、物語がさらに進むと、その原因はさわ子にあったというのが分かってくる。

さわ子は一郎の父親に会うためにA温泉地までやってくる。一郎はさわ子と再会できた父親を目にして「父は待っていたんだ」とふっと思う。

たしかに父親は、自分の心のなかに潜りこんでしまった待つ気分に苛立ちながら、この三日間を鄙びた土地で過ごしていたのだ。<sup>21</sup>

21  
同注17、26-27頁

たしかに一郎のこの語りによって父親の苛立ちに説明がつくように思える。ただ、A温泉地での父親の苛立ちに説明が付いたとしても、この小説にみる父親の一郎に対しての言動が「もっともな理由のある、正当な行為」として合理化されるわけではないだろう。本稿は、一郎が父親との関係において傷ついている、或いは傷つく可能性があるということを指摘したい。その手掛かりとなるのは物語の結末である。「夏の休暇」は次のように幕を閉じる。

海では父親の頭が、黒い小さな点となって見えていたが、やがて海のひろがり一回に三角形に騒ぎ立っている波のあいだに紛れて、見えなくなってしまった。あと何十分か経てば、あのがむしゃらな父親の姿は、この海のどこかから現われてくるにきまっているのだと考えながらも、一郎ははげしい怯えがからだを突き抜けてゆくのを覚えた。それと同時にになかしら解放感のようなものが、甘くひろがってゆくことにも気づいていた。<sup>22</sup>

22  
同注17、32頁

荒れている海で泳いでいた父親の波に吞まれる様子が描かれているのだが、じつはつい前日に同じ海辺で水死事件があったということとあわせて考えると、この結末は父親の死を暗示しているとも読める。注目したいのは「解放感のようなもの」という表現である。父親の死がもたらした「解放感」たるものはどう解釈すればいいのか。例えば木谷喜美枝は物語の結末について以下のように論じている。

父親の姿は三角形に騒ぎ立つ波間に消えたとき、一郎は怯えと解放感のようなものを同時に感じている。《父親》喪失の恐れであり、同時に一郎の自立への感覚だった。それは《父親》への無意識の思慕を語っている。<sup>23</sup>

23

木谷喜美枝「吉行淳之介『夏の休暇』  
『国文学 解釈と鑑賞』69(4)、至文堂、  
2004年4月、138頁

木谷は一郎の感じた「解放感」を「自立への感覚」と解釈している。木谷は如何なる意味で「自立」と述べているのか。木谷論の文脈を確認すると、一郎の父親への思いは以下のように論じられている。

一郎の目に父親は「青年の横顔」を見せ、それは「抵抗できぬ美少年のもの」を感じさせたのだ。一郎は《父親》に心酔し、超えることはできなかった。それこそが《父親》のあるべき姿として、吉行淳之介にとって、あつと言う間に亡くなってしまった《父親》というものに求めるものだったのではないだろうか。<sup>24</sup>

24

同注23、138頁

ということは、木谷の言う「自立」とは、おそらく一郎が超えられなかった父親の死によってやっと一人前になれることを意味していよう。だとしても、父親の死がもたらした「自立への感覚」自体は、一郎が父親との関係において如何に抑圧されているのかを物語っているのではないか。また、一郎の父親への思いは「思慕」という言葉で単純化されている気がする。物語の結末にみる一郎の身体感覚を父親への思慕に還元した木谷はこの小説の父子関係についてさらに次のように述べている。

社会の規範からほど遠そうな《父親》が、思いがけず人間関係や社会の仕組みを教えたことになる。いや、それは父親が自然のうちに、一郎を教育したということになるのではなからうか。／注目すべきは、主人公一郎が、本当に希有なこととして自分との時間を持ってくれた父親に対し、ダシにされ、めちゃくちゃだったが、最後までその父親に反抗したりしていないのだ。<sup>25</sup>

25

同注23、137頁、138頁

父子の絆のようなものを否定するつもりはないが、父親の言動を「もっともな理由」をつけて「正当な行為」として見なさそうとするような論じ方には賛同できない。前にも述べたが、父親はこの小説において最初から強い存在として描かれている。そして、その強さは一郎にとってそもそも反抗し難いほどのものである。一郎もそれをはっきりと分っているので、ここまで見てきたように父親の八つ当たりの怒り方を我慢したり父親に気を遣ったりすることしかできなかったのである。このように、父子関係において抑圧される息子の従属性はこの小説に確実に書きこまれていられる。したがって、父親を慕っているため反抗しないというだけでなく、父親を恐れる故に反抗できないという側面も考えられる。むしろ、後者の方がより自然なのではないか。本稿では、物語の結末にみる一郎の体に拡がっていく「解放感」を、一郎が父親に八つ当たりされる際などのつらい思いから解放されると分った途端に素直に感じた安心感として読みたい。「夏の休暇」にみられる父親の暴力性と父親の死がもたらす



「解放感」は、吉行の後の短編小説「梅雨の頃」においてより前景化する。

#### 4. 「梅雨の頃」の生き残りの競争と一郎の恐怖

1956年7月号の『文学界』に掲載された「梅雨の頃」という物語の中心となるのは、主人公の一郎が腸チフスに罹って入院するという出来事である。じつは吉行淳之介は16歳の時に腸チフスにかかり、半年程入院生活を送った<sup>26</sup>。したがって、「梅雨の頃」は吉行の16歳の時の実体験を基に書かれたもので、「事実関係とその内面を的確に描いた」<sup>27</sup>、リアリティを感じさせる作品であるとされている。物語は15歳の一郎が高熱を発するところから始まる。一郎はなかなか下らない熱に苦しみ、おまけに医者から腸チフスという伝染病名を言い渡され入院することになる。普段家に滅多にいない一郎の父親は、一郎の入院する前も入院中も一郎の様子を見に顔を出す。しかし、そのたび、父親は一郎に対して「虚弱児童」という言葉を吐き捨てる。

外泊が多くて殆ど家の中で姿を見ることができない一郎の父親は「まったく虚弱児童には、困ったもんだな」と、嘔んで吐きだすように言うと、掛布団を一郎の頭の上まで引きずり上げて、一郎をフトン蒸しにすることに手を貸した。<sup>28</sup>

そして一郎は入院中でも父親に同じことを言われる。

父親は、一郎の様子をじろじろ眺めまわしてから言った。「虚弱児童には困ったもんだな。だからそんな病気にとりつかれるんだ。」<sup>29</sup>

「虚弱児童」という言葉は、一郎を呪縛するかのよう父親から何度も発せられる。だが、じつは一郎は父親の言うほど病弱ではない。実際、一郎は「中学入学以来はほとんど学校を休んだことはない」のだ。にもかかわらず、一郎の弱さは父親の言葉によって強調され前景化される。一方、父親は健康で体格のいい人として描かれている。

痩身だった父は、近年肥りはじめて二十貫にもなった。しかし、四十歳には間のある父の肥りかたには贅肉はなかった。<sup>30</sup>

そのため、「ガムシャラな父親」にしてみれば、一郎のような子供はみな「虚弱児童」に見えるようである。一郎と父親は、ひ弱い少年と逞しい男というように対照的に描かれている。一郎の男性性は、父親の「虚弱児童」という言葉によって執拗に規定されてしまう。「虚弱児童」という言葉はさらに父親と一郎の関係を強制的に序列化し、加えて、恰幅のいい父親と虚弱児童の一郎という序列関係を作り上げてしまう。あまりにも「虚弱児童」と言われるので、一郎はやがてその言葉に苛立ちを覚え、我慢の限界に達する。

26

高橋広満『吉行淳之介』勉誠出版社、2007年10月、20-21頁

27

山本容朗「解説——生きてきた証明書」『子供の領分』集英社、1998年6月（第6刷）、218頁

28

吉行淳之介「梅雨の頃」『子供の領分』番町書房、1975年12月、48頁

29

同注28、53頁

30

同注28、53-54頁

しかし、あまりに屢々それが繰返されるうちに、一郎はついに辛抱し切れなくなった。或日、一郎は叫んだのである。「そんなことを言ったって、結局、お父さんの方が先に死んじまうんだからな」<sup>31</sup>

31  
同注28、55頁

ところが、父親は一郎の反抗の気配に対して「唇のまわりに笑いを浮かべながらジロジロ眺め」、余裕のある様子を見せる。一郎はさらに「それじゃ、どっちが後まで生きるか、競争することにしよう」と、生き残りの競争を父親に仕掛ける。一郎はこの生き残りの競争を通して父親との関係、つまり上下の序列関係を転覆させようとしていいると考えられる。物語は、一郎の提案によってエディプスの父殺し物語を彷彿させる展開となるのである。

いま「梅雨の頃」は一郎の競争の提案のせいでエディプスの父殺し物語を彷彿させる展開になると述べたが、この点についてもう少し切り込んでみたい。じつは父親は一郎の競争の提案を面白がってさらなる提案をしていた。

「それじゃ一郎、こうしよう。おまえとおれとそれぞれ生命保険に入ることしよう。おまえの保険金の受取人はおれ、おれの受取人はおまえ、ということにしておけばだな、賭に勝った方が金が取れるというわけだ。どうだ、うまい考えだろう。」父親は、自分の思いつきがすっかり気に入った様子になった。<sup>32</sup>

32  
同注28、55-56頁

父親は生き残りの競争の褒賞として保険金、つまり大金を提案する。大金は欲望の対象として対抗関係の構造を補強する。というのは、欲望の対象が対抗関係に組み入れられると、模倣の欲望が引き起こされ、対抗関係は欲望の三角形へと変形するからである。元々一郎から仕掛けた生き残りの競争は、父親の褒賞の提案によって仕掛け直される。筆者は褒賞の保険金という設定に目を引かれた。言うまでもないが、保険金は誰かが命を落とさないと手には入れないものである。なので、保険金は一郎の死、つまり一郎の身体と交換されるものとも言えよう。だとしたら、父親が狙う＝欲望するものは一郎の身体と緊密に結びついている。つまり、一郎にとって、父親の提案は一郎の身体を褒賞として奪取することに等しい。一郎の身体は父親によって欲望され、危機に晒されるのである。エディプス三角形では息子は父親の欲望するものを奪い取るのだが、一郎の場合は自分の所有する身体が父親の欲望の対象として差し出されている。そのため、一郎は自分の身体を欲望する父親に対する模倣の欲望を生じさせ得ない。それは、自らが父親のように自分の身体を褒賞として狙うわけにはいかないからである。このことから、一郎と父親の対抗関係はエディプス三角形から逸脱しており、エディプス三角形の機能が果たされないことがわかる。つまり、「梅雨の頃」はエディプスの父殺し物語のような展開を見せながらも、じつは父殺しに向わないのである。それどころか、一郎は自らの提案した生き残りの競争によって、思いも寄らなかった恐怖の底へと陥るのである。

生き残りの競争が続く中、「父親は一郎が入院してかなり日数が経ってから

見舞に」また姿を現す。しかも大きなメロンを持ってくる。一郎はメロンをすすめてくる父親に対して疑わしい顔をする。

「びくびくするな。大丈夫だ」「だって、おカユの飯粒でも腸に穴が明くというくらいなもの。メロンには、剛い繊維があるからな」<sup>33</sup>

33  
同注28、53頁

父親は一郎の「虚弱ぶり」を見て「熱が下ったら、早速牛肉を百匁ずつ一度に食べさせてやる」と不満げに言い出す。牛肉を食べさせてやるという言葉は、一郎の頭の中で「意味ありげな、残酷な音色にひびき渡」る。一郎には、「父親の手に持たれたメロンが、炸裂弾のように見える瞬間」さえあるのだ。一郎が父親の言葉を「残酷」だと受けとるのは、その背景に父親との生き残りの競争があるからではあるが、父親に発せられた言葉の持つ意味と暴力性についてももう少し考えてみたい。例えば、北川東子は暴力的言語行為について以下のように論じている。

心理的な暴力となって深く浸透してくるのは、むしろなにげなくことばが発せられた場合でありながら、そのことばが暗示している不信の念や、他者のことばに投影されたあまりにみじめな自分の姿が露呈されるときだ。しかも多くの場合、そうしたみじめさから逃げ出すことができない。わたしたちが「不当な」解釈の対象とされてしまっているからである。<sup>34</sup>

34  
北川東子「解釈の暴力と解釈の「病理学」」「理性と暴力——現象学と人間科学」世界書院、1997年5月、295頁

つまり言語の暴力性は、ただ直接的な侮辱的な言葉によって発生するだけではない。われわれは言葉の発せられた文脈に置かれている自分の状況、あるいは状態にあらためて気付かされる際、それだけでも深く傷つくことがある。このように考えると、この場面で、一郎が、父親の言葉によって腸チフスにかかった、まさに「虚弱」になっている自分に強制的に向き合わされることになるのを見過ごすことはできない。「牛肉百匁ずつ一度に食べさせてやる」という言葉は、一郎の「虚弱」な身体、病気にかかったみじめな姿を無残に晒すためかのように発せられる。そこに父親の言葉の暴力性を見出すことができよう。

父親の言葉の暴力性は一郎を酷く傷つける。その後、一郎は牛肉を食べることを思うと何度も恐怖を感じてしまい、怖ろしい幻覚をも見ることもある。

病気が治ったら直ぐに一郎の腹の中に詰め込もうと父親が意気込んでいる百匁の牛肉が、カサブタが剥がれたばかりの弱々しい腸壁を、悪意をこめてザラザラと擦りながら通り過ぎてゆく幻覚に襲われる瞬間もあった。<sup>35</sup>

35  
同注28、56頁

また、一郎は母親の不意の言葉にも恐怖を覚えてしまう。

見舞に來た母親は、「一郎がモノを食えるようになったら、早速牛肉をうんと食わしてやるんだ、といってお父さんが張り切っていたわよ」と言った。一郎は不意にひどい怯えを覚えた。(略)一郎は、チフスの恢復期に患者を襲うという猛烈な食欲のことを考えると、烈しい恐怖を襲われはじめた。／そして、その恢復期に洪水のように押し寄せてくる赤い牛肉の幻影。<sup>36</sup>

36  
同注28、57頁、58頁

牛肉を食べさせてやるという父親の言葉は一郎のなかで幻覚などの形で反復されている。その言葉の反復は、一郎を言葉の暴力に何度も晒し、一郎の心身に虚弱さを喚起させて濃い不安の影を落とす。そして、一郎の感じる食欲への「烈しい恐怖」は、牛肉を食べさせようとする父親(とその言葉)に由来し、死への恐怖に還元される。一郎は恐怖を抱えたまま、腸チフスの回復期を迎える。しかし、本来「回復期の患者を必ず襲う筈の、猛烈な食欲」はわいてこない。

柔らかい食物である筈の隠元豆を嚙んでいると、中から半透明の小さな三日月のものが出てきたりする。その薄皮は、意外と両端が鋭く堅い。それが自分の腸壁に触れて通り過ぎる光景を想像すると、一郎はどうしても固形物を口の中へ入れる気持になれないのだ。<sup>37</sup>

37  
同注28、61頁

回復期に入っても一郎は食べることへの「烈しい恐怖」を払拭することができない。柔らかいインゲン豆でも食べられないのは、父親の言葉によって植えつけられた恐怖の肥大化を物語る。一郎(とその身体)は、いつか牛肉をもってやってくる父親の暴力性に完全に虚弱化された状態に陥り、父親との対抗関係において克服すべき課題が克服されるどころか、恐怖に飲み込まれてしまうのである。ただ、後にある出来事に起因して一郎の食欲は突然復活する。

退院した日、一郎ははじめて父親の急死を告げられた。全く予測していなかった事実なので、しばらく一郎は啞然とした。それからにわかに悲しくなると、すこし泣いた。しかし、心の底の方では、解放された気分がゆるゆると拡がってゆくのを制することはできなかった。父親の死を知った時から、一郎を悩ましていた食物に対する恐怖はすっかり拭い去られてしまった。食欲が甦って、一郎はぐんぐん肥りはじめた。<sup>38</sup>

38  
同注28、61-62頁

父親は死んだのである。父親の死は、牛肉を強制的に食べさせられることを解消し、一郎を言葉の暴力から救出することをもたらす。それで、「牛肉の幻影」はもう襲ってこないと思った一郎には「解放された気分がゆるゆると拡がってゆく」。この「解放された気分」は「夏の休暇」の結末にみる「解放感のようなもの」を想起させる。両者とも父親の暴力性に抑圧される状況から脱出した時の安堵感を表現している。これはただの偶然の重なりではないだろう。「夏の休暇」と「梅雨の頃」にみられる「解放感」という表現は、少年が父親の暴力によって抑圧され身体の脆弱性が前景化するという主題を窺わせるのである。一郎が受けた暴力の受け皿となったこの二つの物語は、男性中心社会において従来合理化されてきた父親の暴力性を暴き出すものとして読めるのではないか。

## 5. おわりに

本稿は、吉行淳之介文学における「従属的男性性」に焦点を当てて弱い息子

の物語を読んできた。吉行の作品にみる父子関係が、全てエディプスの図式に当てはまるわけではない。吉行文学における暴力的な言葉によって抑圧され、身体の脆弱性が前景化する少年という主題を発見し、父子関係に注目することによって、父親による暴力にさらされる主人公の少年のことを「従属的男性性」として抽出して位置づけた。加えて、男性中心社会において合理化されてきた父親の暴力性を指摘した。これらの成果によって、吉行淳之介文学における男性性は均質なものではないということを本稿の結論として強調したい。

ただ、誤解のないようにあえて言っておきたいのは、「男性」の中で従属化された男性の存在を可視化したとしても、「女性」が男性中心社会において抑圧され支配されているという事実には何の変化も与えない。本稿が「男性」内部の序列問題に注目するのは、「男性—女性」という非対称的な関係を覆すことを目的としているわけではない。むしろ、従属化された男性が自分より弱い立場の者（例えば女性）に従属させることを通して支配的な立場に立ち得るということをも問題視したいのだ。そこで、先に参照した、「特定のタイプの男性性が、女性性と他のタイプの男性性に従属させることによって、全体としての男性による女性支配を正当化する」という多賀の男性支配の社会構造についての指摘をあらためて振り返ってみると、多賀の指摘には「従属的男性性」と女性性の関係性への言及が欠けていることに気づく。では、「従属的男性性」と女性性の関係性はどうか考えればいいのか。最後に、同じく病弱な少年を描いた吉行淳之介の「春の声」（1966年）に目を向けておきたい。「春の声」は「腺病質な痩せた体格をしている」二人の少年、町田と石井の喧嘩のシーンから始まる。喧嘩の原因は町田による挑発である。

町田が、投げ飛ばす快感をぬすみ取ろうとたくらんだわけだ。そのための相手としては、石井しかない。ほかの連中では、手ごわ過ぎる。<sup>39</sup>

この叙述から、町田は石井以外の男の子と比べて力が弱く、自らの力強さを確認するためにさらに弱い石井に喧嘩を売っていることがわかる。そのような二人の描き方で最も重要なのは、石井には、「睫毛の長い少女のような眼」と「すべすべした皮膚」を持っているというように、女性性が付されているということである<sup>40</sup>。町田と石井の関係性に女性性が組み入れられていることはとても興味深い。つまり、「春の声」には、「従属的男性性」を持つ少年が力学関係において優位に立つために、女性性の支配に走るという図式が見られるのである。このように、従属化された男性性が女性性を恣意的に利用して利己的な力関係を築くことは十分考えられる。特定の男性性に従属化されたといっても、「従属的男性性」は「男性」の一部として女性支配に加担したりすることがあるのだ。この点を吉行淳之介文学における「従属的男性性」を追ってきた本稿の最後にあらためて記述しておきたい。「男性」内部の「従属的男性性」の可視化は重要なことである。だが、同時に「従属的男性性」がどのようにして「男性」による女性嫌悪の構造に関わるのかにも目を配る必要があるのだ。

39

吉行淳之介「春の声」『子供の領分』番町書房、1975年12月、222頁

40

同注39、224–225頁